

重要であると考えられる現象を捉えてそれを説明する理論を工夫することである。そうした地道な作業の積み重ねのみが国際政治理論を豊かにするのであろう。その際に重要なことは、ホルスティが論じているように、独りよがりでない、世界中の研究者がその業績と自己の関心とを比較できるような形での理論建てを工夫することである。また、これもホルスティが言うよ

うに、そうした理論は単にアイディアを示すようなものであってはならない。その意味でも理論は、一人の学者の取り組むことのできる理論は、限定されたもの以上ではありえない。自己の限界と理論の限界とを明確に意識できたときに初めてその理論は国際政治理論の中にはっきりと位置付けられるのであろう。

動パターン、趨勢、機構、構造と過程のことである。(3)理論志向の理論、(4)価値志向の理論、(5)哲学的な問題を含むようなよりメタな理論。こうした関心から研究者は理論の発展を目指すのである。

3

この著書でもはっきりとあらわれているホルスティの学問的な寛容は私たちのすべてが学ぶべき態度である。国際政治の理論を豊かにしていくためには学問的な寛容がどうしても必要になるからである。

国際政治理論は、ホルスティの述べるように、T・クーンが自然科学について述べたような意味でのパラダイムを持つことのできない分野であるはずである。そうであるとすれば、国際政治の理論ははるか昔から存在してきた理論に新しい理論を付け加えるという形でしか発展しえないであろう。私たちの提出する新しい理論はその意味である極めて限られた範囲を扱う理論なのであって、そのことをしっかりと意識することは重要なことである。国際政治の現実とは極めて多様であって、この多様な現実を捉えるためには異なった特色を持った多くの国際政治理論が登場することが学問の進歩のために極めて有用である。それ故、多様な、場合によっては相当にマイナーな主題を取り上げているような理論も国際政治理論の発展のためには決して無視されるようなことがあってはならない。

60年代以降、国際政治の理論には様々な議論と「流行」があった。行動主義の現実主義に対する批判は激しいものがあつたが、30年近くた

ってみれば、現実主義の側に立つ人間にとっても行動主義的な方法は無視できるものではなくなっているし、また、行動主義を主張した人間にとっても行動主義的な方法の適用できる領域はそれほど大きくなく、現実主義的な洞察がやはり無視できない価値を持っているものであることを認めるようになった。知的寛容が重要である所以である。

70年代以降、特にアメリカの学界において、国際政治理論の流行といえるような理論が次々に現れた。政策決定論、統合論、相互依存論、レジーム論、覇権論などである。それぞれ極めて価値のある理論であることは間違いない。日本においてもこれらの理論が学界で華々しく取り上げられた。しかし、ホルスティも述べているように、これらの理論は極めてアメリカ的な癖、偏狭性を持っていることに気がつかなくてはいけない。当然のことながらこれらの理論から漏れてしまう国際政治上の事象は無数にあるといつてよい。たとえば、アメリカと多くのつながりを持っていないアジアの小国やアフリカ諸国はこれらの理論ではほとんど無視されてしまっている。国際政治の理論が国際政治のあらゆる事象を対象としようと思えば、こうしたアメリカ産の理論によってはカバーできない部分を捉える理論に取り組まなければならない。

日本の研究者が国際政治の理論にわずかでも貢献しようと思えば、アメリカの流行を追うことによってではなく、アメリカの研究者では決して発想のできない理論を組み立て、日本自身や日本と密接なつながりを持つ国々の国際関係や外交政策を捉えることである。あるいは、スポットライトをなかなか浴びることはなくても

めている。国家と国家システムを批判するものの第1に上げられているのは、国家システムこそが戦争の原因であるとするものである。その代表的なものは覇権論、あるいは、パワー・サイクルの理論である。これに対してホルスティは、国家システムの下でも平和な期間というものには十分に存在しているし、大きな戦争は、このシステム内部から必然的に起きたというよりも、このシステムそのものを壊そうとする試みであったと論じている。ネーション・ステートの衰退を論じる第2のものは、相互依存論である。輸送手段や通信手段の発達によって国境の壁は極めて低くなり、情報・モノ・人の行き来を国家は管理しきれなくなっており、また、核兵器の出現により国家が安全保障を確保し得なくなっていることから、国家の役割は顕著に後退しており、国家という枠組みが時代後れになりつつあると論じる。これに対してホルスティは、国家の役割が国際政治の中で限定されたものになってきているのは先進諸国にとっては確かにその通りかもしれないが、世界の大部分を占めている第3世界の国々にとってみれば、国家の建設こそが依然として重大なテーマであり、また、民族意識の噴出といった現象を見れば、国民国家が時代後れのものであるとはとても言えるような状況ではないと論じている。

第11章(“International Theory: National or International?”)に収録されている論文は、最初にも紹介したように、日本国際政治学会設立30周年記念講演として行われたものである。この論文では、国際政治理論がそもそも根底に研究者の価値が存在しているということを指摘し、さらに、それぞれの研究者が偏狭性を抱え

る可能性を常に持っていることを指摘している。研究者は自己の持つ価値と偏狭性を明確に意識する必要がある。ホルスティが上げている偏狭性とは次の2つである。第1は、研究者の持つ国民性の問題である。研究者は自己の属する国という限定から自由であろうとするわけだが、利用できる資料や語学の拘束などから国民性の限定から逃れることは難しい。現代の国際政治理論は強くアメリカによってリードされておりアメリカ的な価値が強い影響を与えていることを、特にアメリカの研究者は知るべきであると指摘している。第2に、自己の提出する理論が正統になることを望む気持ちが上げられている。ホルスティが繰り返し指摘しているように、国際政治理論が唯一つの決定版と位置付けられる理論となることはありえないのであり、自己の理論があたかも決定版にふさわしいかのように主張して、他の理論を批判することはまさに偏狭性を表すものであるとしている。国際政治理論はこうした偏狭性を克服して、多元的な学問の発展をしなくてはならないと主張している。

第12章(“Mirror, Mirror on the Wall, Which are the Fairest Theories of All?”)でもこれまでの章で繰り返し主張しているのと同様に、国際政治理論にグランド・セオリーは存在せず、健全な多元主義を受け入れるべきであると論じている。健全な学問的多元主義こそが国際政治理論の進歩を促進するものであり、ホルスティはここで理論的な発展の源泉を5つ指摘している。すなわち、(1) 事件に触発された理論、(2) 事実に触発された理論、ここでいう事実(fact)とは国際関係における行動主体、行

R・ローズクランズ、G・モデルスキー、K・ウォルツなど)。第2に、サブ・システムを対象としたもの(統合論や相互依存論、レジーム論など)。第3に、諸国家の特性と外交政策のつながりを論じたもの(リベラリストやマルキストの議論)。第4に、指導者の人格や指導者の置かれている政治的環境から外交政策を説明しようとするもの(R・シュナイダー、G・アリソンなど)。第5に、これは前4者を横断するものとも言えるのだが、国際政治理論の中心的概念であるパワーの概念と、パワーを背景とした外交交渉の実態とその変化を扱うもの(R・コヘインとJ・ナイがその代表)。さらにホルスティは、彼の著書である *The Dividing Discipline* により詳しく論じられているが、以上のような伝統的な国際政治理論に対して新しい国際政治理論が登場しているとして次の2つを付け加えている。すなわち、従属論と地球社会論である。従属論は、従来の国際政治理論が戦争の原因と平和の条件を中心的なテーマとしてきたのに対して、国際的な場での「平等」を理論の中心としており、「平等」という価値は国際政治においても重大なテーマであるので、今後国際政治理論の中でも重要な位置を占め続けるであろうと、ホルスティは高く評価している。地球社会論は、従来の国際政治論では現代の国際政治の現実を捉え切れなくなっているとして、国家を中心とした理論建てを強く批判する。国家以外の行動主体が国際政治において重要な役割を果たしていることに注目して、ステート・システムから国際政治を論じることの不適合を論じるのである。現代の国際政治をよりよく捉えるためには、地球社会やグローバル・イ

ンタレストという観点から国際理論は組み立てられる必要があると主張する。ホルスティは従来の国際政治理論を根本から見直すことを主張するこうした論議を、国際政治の理論をさらに多様化するものとして高く評価している。

第9章(“The Comparative Analysis of Foreign Policy: Some Notes on the Pitfalls and Paths to Theory”)では、外交政策の研究をする際に比較の観点を意識することが重要であり、比較を可能にするためには外交政策の概念についての研究者のコンセンサスが得られなくてはならないとして、外交政策についてのモデルを提出している。従来の理論では外交政策とは、「パワーを最大にするもの」と「目的を達成するもの」という2つの観点から論じられてきたが、ホルスティは、「問題解決(problem-solving)」という観点から捉えることをここで論じている。すべての政府が直面する課題を4つに分類して、様々な国家の外交政策をこの4点から比較することを提唱している。4点とは次のようなものである。(1)自律性、(2)福祉、(3)安全保障、(4)国家体制の維持。外交政策の研究者がこうした理論的な枠組みを意識することは重要なことである。それによって初めて各国の外交政策が意味のある形で比較され得るからだ。

第10章(“The Necrologists of International Relations”)において、ホルスティは、従来の伝統的な国際政治理論が依拠している国家と国家システムを強く批判する理論に対して、国家システムの根強さとそれを中心として理論を組み立てることの依然として適切であることを主張して、それを簡単に退けようとする議論を諫

は、外交政策における「大砲かバターか」の問題を論じている。50年代60年代は冷戦の影響もあって、安全保障の問題が国際関係の理論においても中心的な位置を占めていた。70年代になるとデタントとオイル・ショックの影響によって、国際関係の経済的側面が俄然注目を集めるようになった。国際政治経済といった領域が国際政治理論の中に登場してきたのもこうしたことの現れであった。そうした流れの中で、安全保障の問題と経済の問題とが分離されて考えられるようになった。しかし、経済の問題を安全保障の問題と別個に考えることのできる国は先進工業諸国というごく限られた存在においてのみ可能なのであって、他のほとんどの国々においては「大砲かバターか」という問題は依然として重要な問題である。ホルスティは、その2つがぶつかりあう場合、多くの国にとって国家の自律性を守るためには、経済的な効率や利益は安全保障に従属する価値であることを論じている。

第6章（“Revolution in the Revolution: World Views and Foreign Policy Change in the Soviet Union”）では、ソ連が1917年の革命以降抱いていた世界観がいかなるものであったかを次の4つの側面から論じている。すなわち(1)歴史における紛争の役割、(2)資本主義世界の本質、(3)世界革命の要塞としてのソ連の役割と仕事、(4)社会主義世界秩序の建設者としてのソ連、である。ホルスティによれば、これら4つの側面についてその時代その時代に政策として様々な表現がされてきたけれども、基本的にレーニンが定式化した一定の原則を踏みはずしたことは1988年まで1度もなかった。ところが、

ゴルバチョフの登場はこれらのすべての点でソ連の政策に変更を迫るものになった。こうした変化は表面的なものでなく根本的なものであることをホルスティは4つの側面から理論的に論じている。第1章で彼が述べているのだが、政策の変化を単にパワーの後退といったような物質的な環境変化からだけでなく、指導者のものの考え方の変化という側面から論じることは重要なことである。

第7章（“Retreat from Utopia: International Relations Theory, 1945–1970”）では、国際政治学のグランド・セオリーを求めることは一種の幻想であり、それよりは理論的な試みが様々な観点から多様になされるほうが現実の複雑さを写し取る試みとしては適切であることを強く論じている。本書、特にこの第7章以降の第2部にまとめられた論文の主題は一貫してこの点にあるが、ホルスティは、60年代の行動主義革命の過程で行われた現実主義批判のあり方を強く批判している。どちらかの理論が完全に正しく、どちらかが完全に間違っているとするような議論の仕方は、国際政治理論の発展に取ってプラスにならないことを述べている。

第8章（“Along the Road to International Thoery”）でも第7章と同様に、国際政治の理論がただひとつのパラダイムに収斂することはありえず、むしろ様々な問題を捉えるためにますます多様化されていくことが必要であると述べられている。その上で、1945年以降の国際政治の理論を次の観点から整理している。すなわち、従来の国際政治理論は大きく分けて次の5つを対象としたものに分けられる。第1に、国際システムを対象としたもの（M・カプラン、

行っている理論研究がどのような限定の中で行われているかを明確に意識して研究を進めていくことは重要である。その上で、様々な他の国際政治理論と自己の限定された範囲での理論がどのような関係にあるかを位置付けていくこともまた重要なことである。

2

本書は以上のような問題関心に貫かれた論文を集めた論文集である。全体を俯瞰するために書き下ろされた第1章を除いて、第2章以降の11章を紹介しよう。

第2章(“Underdevelopment and the ‘Gap’ Theory of International Conflict”)において、ホルスティは低開発国が悲惨であるのは近代化が成功しないからでなく、開発の過程こそが最も苦痛に満ちたものになっており、西欧中心の低開発国の捉え方を根本的に見直す必要のあることを説いている。さらに第三世界諸国における紛争が冷戦による大国の代理紛争として解釈されがちであるのに対して、第三世界の紛争は確かにそういう性質のものも多いことは確かではあるけれども、紛争の原因がその国特有のものであったり、近代化と大きな関係を持ったものであることも多いことを指摘している。

第3章(“Change in International System: Interdependence, Integration, and Fragmentation”)では、一世を風靡した「統合論」や「相互依存論」が見落としていた点を鋭く指摘している。すなわち、カナダとアメリカの関係を例にとって、ホルスティは、たとえ相互依存を進め、統合という段階を迎えた方が経済的に大き

な利益になる場合でも、その関係が多くの点で非対称的である場合には、たとえ経済的な不利を破っても、固有の文化や価値を守ろうという動きが現れるということを指摘している。すなわち、第1に、統合論や相互依存論はナショナリズムを軽視しすぎているという点、第2に、統合論や相互依存論の対象があまりにも欧米に偏りすぎている点を指摘している。統合は普遍的な現象であるよりむしろ西ヨーロッパに特有のことであり、相互依存も、主に先進工業諸国の間でのことであることを意識することが重要であると強調している。それに反して世界にはむしろ統合とは全く反対の分離主義的な動きが噴出していることにも注目する必要があると述べている。

第4章(“Restructuring Foreign Policy: A Neglected Phenomenon in Foreign Policy Theory”)においては、スタティックな分析に陥りがちな外交政策の理論の中に、外交政策のドラスティックな変化を捉えて位置付けようとする試みを展開している。たとえば、ビルマは非同盟諸国の中で活発に活動していたにもかかわらず、突然鎖国状態に外交政策を変更したように、ある一国の外交政策は大きな変更の加えられる場合がないわけではない。確かにホルスティの言うように、これまでの外交政策の理論はキューバ危機のように危機的な状況における外交を捉えようとする試みが主流であって、一国の外交政策の変化を捉える試みが十分になされているとは言えない。そうした変化をどのように捉えたらよいかをここでは論じている。

第5章(“Politics in Command: Foreign Trade as National Security Policy”)において

書 評

K. J. ホルスティ『国際システムにおける変化』

柴 田 純 志

K. J. Holsti, *Change in the Internatinal System, Essays on the Theory and Practice of International Relations*, Edward Elgar Publishing Limited, 1991, 253 pp.

Junji Shibata

1

ホルスティは、日本国際政治学会設立30周年記念講演の中で、国際政治学は規範的・哲学的関心から生まれ、倫理的に見てそのテーマが重大であるから研究がなされるのだと述べている。すなわち、研究者の規範的・倫理的関心が研究の根底にあり、こうした関心がテーマの選択ばかりでなく、研究のために使用する方法にも大きな影響のあることを強調している。また、国際政治学は決して唯一正統な理論なるものを持つことはありえないとして、健全な学問上の多元主義を強く説いている。現実世界は非常に複雑多様であって、様々な異なった世界観が並立する方がむしろ現実をよりよく捉える可能性が高いというのである。

本書は1970年から1990年までにホルスティが研究書や学術雑誌に書いた論文を集めた論文集である。本書は12章からなるが、第11章にこの日本での講演のペーパーが収録されている。本

書に収録されている論文を貫いているテーマは、日本での講演で述べられたこととほとんど同じであるといつてよい。ホルスティの国際政治学理論における徹底した多元主義的な考え方が本書でも繰り返し述べられている。

ホルスティが述べるように、国際政治学の理論が決定版というべきひとつの理論に収斂していくことはありえないだろう。国際政治の舞台にたちあらわれる事象は実に多様であり、その悉くを説明する唯一の理論などありうるはずがない。その意味で、国際政治学は古くから存在する様々な理論の不備を補い、新しい事実を捉える理論を付け加えたり、あるいは、まだ取り上げられたことのないやり方で新しい理論を形成して、それまでの理論の集合体にそれをつけ加えていくといったやり方で進歩していく学問なのであるであろう。本書でホルスティが述べているように、国際政治学は自然科学におけるような「パラダイムの転換」といったことと縁のない学問領域であるといえる。それ故、自分の